序

日本族彌榮の理想信仰は、事實を無視したる精神のみの構想せる消息では無い。歴史を閑却せる唯の觀念に止まるもので無い。過去の歴史事實を通じて實現せられ、現在の歴史事實中に生き、未來の歴史事實の爲に存する、萬古一貫の「いのち」の光明の自照として存する自覺であり、夫は實に創設力其の者てある。事實と違ひ又は事實を排斥するものでは無いが、事實の及ばぬ根本である、事實に超越したる一層統括的なる指導力である。愛友三島敦雄君は夙に敬神尊皇の念に篤く、永く神祇國體の根源を研究し、研究せらるるに隨ひ、以上の點に付、彌、其の思を深うせられたといふ。よりて神ながらの道の中心たる　皇室、其の理想信仰に生まれたる

日本族の歴史的事實の根源の根源に溯り、之を實證せんとせられ、萬難を排し、刻苦勉勵十數年にして、此の方面に一路を開かんとせられつつある。但し、其の着想の遠大なると、資料獲得の至難とは、到底獨力の成就し得べからざる所に屬するから、此の方面に向ひ廣く共同研究を開始せんが爲に、其の資の一端として、君の研究案の一部分を公開せらるることとなつた。されば其の内容の一つ一つに至つては元より確定意見として主張せらるるのでは無く、廣く一般討究の爲の問題を提出せられたもので、そこに研究に忠實なる貴さのあるを看取する次第である。然も些少の疑だも超越せる、君に一貫せる不動の精神は、敬神、尊皇、愛國の至情と、我が日本族の理想信仰の世界精神の表現たることの覺信と、其の理想信仰が歴史的事實と離れず絶えず事實の本質として、有らゆる偶然

なる事實を美化し綜合して大事實と成しつつあることの大自覺である。本書の公刊に當り序を請はれたるまゝに、所感をしるすこと斯くの如くである。

紀元二千五百八十七年
昭和二年十二月十五日

覓　克　彦

天地を固め成したるみすまるの
彌榮の皇は日の本の皇
彌榮の御神いなだく皇國の
民とし知れば物思ひ無し

序

日本建國史の徹底と、我民族傳統の精神たる理想信仰の確立とは、國民思想の根柢であらねばならぬ。然るに古來我が建國史は徹底せらるゝに至らず、從つて國體の根源に懷疑を生じ、動もすれば民族傳統の精神は破壞せられ、今や歐米の主我的思想に遇へば、忽にして人心の頽廢思想の惡化動搖を萌し、將に國家の重大なる危機として上下愕然たるものがある。余輩は若年にして神武天皇は吳太伯の裔なりといふ妄誕說ありと聞き、慨然として建國史の不徹底は必ず國體の缺陷にして、國家の禍根なるべきを深く痛感せざるを得なかつた。然して余は建國史の研究を試みたるも水泡に歸し、時勢は推移すると共に、稍もすれば我が國體の淵源は歐米人に因りて玩弄的研究せらるゝの虞あり、日本民族の汚辱これより甚しきはなく、焦慮哄嘆措く能はざるものがあつた。かくて余は深く感ず

る所あり、我が國體の根柢たる皇室並古代神社と創祠氏族との研究を試むるに至つた。余は嘗て原田敬吾氏の高天原バビロニア説を視たるも、余の不敏なる未だ胸底の扉を開くに到らざりしが偶奉仕の伊豫大三島神社(國幣大社大山祇神社)並大長宇津神社と、其の創祠者たる小市國造との神秘的研究に方り、俄然大山積神一名和多志大神は、スルメ語の海神エア又ヤー(Ea)の轉訛神にして、大長宇津神は、日神鎮座地の稱名たるナグNagu(鎮護地)ウツ ut(日神)、小市國造の祖小千命は大和國造の祖、長尾市と同語、ウツの變化なることを發見し、爰に始て天孫人種の根柢に觸るゝの端緒を得るに至れる譯である。

然して余は大正十二年春バビロン學會頭原田先生に會見して歡談時の移るを知らず、當時バビロニア語の研究に就て懇篤なる指導を受けたるは、余の深く肝銘措く能はざるところである。又前印度モン・クメール語マラヨ・ポリネシア語、朝鮮ツングース語等に就ては文學博士坪井九馬三氏の說に負ふ所尠からざるは感謝に堪えざる次第である。

天孫人種の世界東西文明の祖人種たるスメル人の系統たるは、我が皇室に對する尊號並三種神器は勿論、古代神社の祭神、創祠氏族といひ、國家は一家の增大にて君民父子の情ありといふ國家々族主義、君主中心主義、神社中心主義、祭政一致といひ、其他の史的事實も、建國の理想信仰も彼我相一致し、殊に日本原始民族を綜合的研究の結果であるから既に己に斷定的事實であつて、今更寸毫も議論の餘地なきことを固く信ずる。

本著は日本建國人種史であり、日本原始民族史、バビロニア史、人種學、言語學、神話學、神社史、神道史、國民道德史、宗教學、哲學、考古學、美術工藝史等あらゆる方面の基礎である。併し本書著述の主眼は日本民族の人種的本源に遡りて、我が建國史に對する疑惑を一掃して以て國體の尊嚴を顯著にし、民族傳統の大精神たる理想信仰の根柢を究めて以て其の天職を明にする所に在る。日本民族の天職は我等血液の淵源が世界東西文明の大

祖、人類文化の大恩者たるを自覺して以て其の大氣象を興起し、民族の大宗たる我が皇室を中心として以て其の傳統精神たる世界神國化、世界大家族主義を提げて世界人類を救濟する所に存するであらう。　我等は歐米人より東洋の劣等民族として排斥せらるゝ如き腑甲斐なき民族にあらずして、人類文化の創造者たるに目醒なければならぬ。　或は曰く、今日の思想問題は經濟に禍根を有し、其の精神的救濟の如きは迂遠も亦甚しいと、併し思へ、精神を沒却して利に走るものを救濟せんとするは、恰も河水の汎濫を防ぐに水源の禿山を顧みざるの愚であらう。

本書著述の半にして吾が長兒廣基の大患に遇ひて殆筆を抛ち、遂に大正十四年春東都に於て享生十七年五ケ月を一期として永眠しぬ。　爾來余は三斗の熱鐵を呑むの思をしつゝ公務の餘暇を以て完成を急ぎたるは、余の終生忘るゝ能はざる所にして、本著が長兒慰靈の記念となりたるを深く悲しむ。

併し神祕的事實は本年四月始て諸神並亡兒天啓を下し殊に亡兒は「生きて孝養を盡す能はず、希は神として祭らば家を守護し社會を救はん」と、請に因りて若宮と崇め祀り、之より諸神と共に啓示頻にして、所謂幽界存在、靈魂不滅、神社祭祀及び祖先崇拜の原因と結果、祭政一致の意義の類を實地に研究するの便を益〻得るに從つて、今更の如く靈界に對する半信半疑の弱者たりしを恥づると同時に、余が本著に述ぶるスメル時代より傳統の經國の大精神たる天皇も神、國土も神、國民も神孫にて三位一體の地上高天原化の神國主義も、皇祖の天壤無窮の神勅も、皇孫の日神の御子火神として天降り給へるも、單に漠然たる理想信仰や、平凡なる史的事實たる以上に、實に幽顯不二の體驗に因る人生最高の精神文明の表現たる崇嚴神聖なる大事實であることを證據立て、果して亡兒は死せるにあらずして肉體は亡びたるも永遠の靈に生きつゝある譯を覺り得たのであつた。

本著引用の寫眞は、モリス・ヂアストロー著、バビロニア及アッシリア文明論、同氏著、バビロニア及アッシリアの宗教信仰及實行の模樣論、ブルーノ・マイスナー著、バビロニア及アッシリア論、其の他數種の內外圖書より採錄せるものである。願くは小著の發表が動機となり、我が建國史と民族傳統精神の研究勃興して、彌〻國民思想に益する所あらば、不肖の本懷これに過ぎぬ。終に臨みて本著出版の擧を賛し、貴族院議員馬越恭平氏の特別後援を與へられたるは、著者の深く感謝する所である。爰に記して敬意を表する次第である。

天孫人種文明創設紀元六千年
昭和二年十一月印刷成るに臨みて

三島敦雄謹識

天孫人種六千年史の研究目次

第一篇　總論

第一　世界東西文明の大祖スメル人種の大宗家たる我が皇室並日本民族……一

緒言……研究方針……天孫人種はスメル人の系統……日本原始民族構成人種……スメルの地は人類原始的故郷と信ぜらる……バビロニア文明は世界東西文化の基礎……スメル國名の起因……天皇の尊號……皇國……バビロニアの日像鏡、月像頸飾、武神の表像劍……三種神器……菊花紋章……スメル國は神宮を都市の中心とす……バビロニアの神名……日本に於けるバビロニアの神と氏族……日本の國號オホヤマト、秋津洲、伊豫二名洲、筑紫洲……海神を祖神、日神火神を祖先といふは原始思想……我が國に於けるバビロニアの神職名……皇室の所祭神……外宮を先づ祭祀せられ陛下の先づ御參拜ある原因……スメル人の宇宙觀……天孫人種語の變化……日本の國號大倭の一稱日